

全国同人雑誌最優秀賞

発表

昨年からまほろば賞は全国同人雑誌協会と文芸思潮が主催することになりました。今後もこの形で進めさせていただきますので、どうぞよろしく願います。

第一六回新全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇二二年七月一七日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって慎重に審議が行なわれました。作品ごとに各選考委員が鋭利に批評し、熱い議論が交わされました。厳正な審査の結果、左記のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。

昨年から、「まほろば賞」は受賞作品には、賞状と賞金三十万円（賞金は主に寄付によるものです。また二人同時受賞の場合は、恐れ入りますが、一人二十万円とさせていただきます）および記念トロフィーを贈らせていただくこ

とになりました。河林満賞にもそれぞれ賞状と賞金十万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と優秀賞賞金五万円および記念品を贈らせていただきます。優秀賞にも記念品と賞金五万円を贈らせていただきます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人協会・全国同人雑誌振興会及び文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にもいっそう多数の方が御参加くださるようお願いいたします。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの手でこの賞を盛り上げ、育てていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の御参加と御支持を切に願います。次第です。

またこの結果及び選評とその感想・批評の動画、また優秀作品はインターネット「文芸思潮」ホームページでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。

第16回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「光復香港」

〔季刊作家〕99号

鈴木友範

「『よもつ耶』

更待月のこと」

〔札幌文学〕91号

海邦智子

河林満賞

「鴉」

〔南風〕48号

紺野夏子

読者賞

「夢で逢いましょう」

〔朝〕42号

天野いずみ

まほろば賞賞金は、木内是壽氏、故蘭藍子氏、三田村博史氏、来の宮あんず氏、故原石寛氏、夏目日美子氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏、堀井清氏、西島雅博氏、高橋惟文氏、勝又浩氏、越山しづか氏、「北斗」などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「べん」「海」「文芸中部」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。



みた まさひろ
1948 大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」
「空海」「親鸞」など
最近の本「遠き春の日々」
「少年空海アインシュタイン時
空を超える」「天海」
日本文藝家協会副理事長
武蔵野大学名誉教授

二作同時受賞

三田誠広

今回は作品のレベルが例年より高かった。とくに二作品の評価が均衡していて二作同時受賞となった。『よもつ耶（更待月のこと）』（海邦智子）は死に近いタクシー運転手の車に次々と乗客が乗り込み、はかない人生のさまざまな局面を見せていくという構成で、リアリズムを超越した幻想的な作風が効果を挙げている。最後に乗り込んだのは主人公の亡くした妻と子で、そのまま車は黄泉の国に旅立っていくようだ。単なる思いつきの幻想譚ではなく、そこには作者の確固とした世界観、死生観がこめられていて、

の賛同を得られなかったが、ぼくはこの作品の独創性を評価したい。

時代の空気を描いているという点では、『村上君と優のこと』（若栗清子）に注目したい。ロシアのサハリンから来たという金髪の少年と、母子家庭の息子との交流を描いた作品で、ありきたりな差別を受けながらも前向きに生きようとする少年たちの姿が明るく鮮明に描写されている。とくに金髪の少年が髪を黒く染め、日本人の少年が金髪になるという展開がおそらく、小説としての楽しさがあった。『夢で逢いましょう』はいくぶん軽い文体で、不本意な閑職に回された中年女性が、夢と幻想の中でのめりこんでいく姿が描かれている。文体が軽いということはリーダブルなのだが、それが災いして軽い読み物と思つて読み飛ばされる惧れのある作品だ。しかしじっくり読んでみると、幻想にすがらざるをえないヒロインの孤独感が伝わってきて、なかなかの秀作だと感じられた。

他の選考委員の評価が得られなかった『サイクロイド』（荻野央）に、ぼくは一つの可能性を感じた。サイクロイドというのは直線上を転がっていく円の円周上の一点の軌跡を描いた曲線なのだが、数学になじみのない人にとって聞き慣れない用語だろう。作者は詩人としての素養のある人のようで、この作品も散文詩といていい文体で、断片的な叙述がアトラダムにつながっていく構成になって

揺るぎのない作品世界を構成している。『光復香港』（鈴木友範）はぼくと同世代の書き手で、かつての学生運動と現在の香港の民主化運動を重ね合わせた構成に工夫があった。半世紀前の日本の学生運動を描いた部分は作者の実体験なのだろう。現在の香港を描いた部分も作者の体験から生じたものと思われ、双方の世界にリアリティーがあった。学生運動を描いた作品は多く書かれているはずだが、現代の香港と重ね合わせることによって、独自の視点が設定されている点を高く評価したい。

他の候補作も充実していた。『鴉』（紺野夏子）は長く消息を絶っていた父親が、実はつい最近まで存命していて、母親とは文通していたという設定で、娘がその父親の住居を訪ねていくところから始まる。娘にとって父親は過去の人だ。ところが父親が書斎にしていたと思われる部屋の窓の外には鴉がいてこちらを見ている。鴉は父親の姿を探しているようにも見える。そのあたりから、家族とは何かという深く重いテーマが、重厚な文体とともに読者の胸に迫ってくる。『水水母』（木山葉子）も濃密な文体が作品世界を支えている。別れた夫が大量に保有していた学生時代の女友達からの手紙が、ヒロインの胸に癒しがたい傷を穿っている。その過去へのこだわりが、精神を病んだような幻想的な断片が交錯する独自の作品世界へと読者を誘う。リアリズム作品と見ると辻褄の合わない点が多く他の委員

いる。それでもテーマはある。二人いる娘のうちの一人が障害をかかえているのだ。ぼくは障害者本人や家族が書いた作文コンクールの選考を十年くらい続けているので、障害者の悲喜こもごもの日常については数多くの作品を読んできた。そこにはさまざまな世界観が描かれているのだが、障害者をかかえた家族には一種の哲学が必要だという点では一致している。この作品にも哲学がある。しかしそれはヒューマニズムとか、運命を受け容れる諦念とかいったものとは隔絶した、きわめてユニークな視点だ。書き手が詩人であり、また数学にも見識をもった人で、そこから詩的な想像力とサイクロイドという図形のもつ不思議なイメージが結びついた、独特な詩的な言辞が次から次へと心地よく紡ぎ出されて、魔法のような作品空間が現出することになる。残念ながら既存詩人の作品を引用したところが二箇所あり、効果を挙げているように感じられる。また詩的なレトリックが高踏的で多くの読者がついていけないという難点は確かにある。だが小説というのは本来、何をどう書いてもいい自由なものだ。読者がどう思おうと、これを書きたいという切実な思いがあれば、書きたいことを書けばいいのであって、作品の評価などは二の次というべきだろう。こういう作品が掲載されているところに、同人誌というもの



こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マ
ネージャーを務めるかたわら
文学修行
88「風の河」で文学界新人賞
を受賞
他の作品に「消える島」「後
生橋」「光の群れ」「火の闇」
などがある

同人雑誌の質の高さ

小浜清志

今回は七作品と少し多めではあったが、どれも趣があり
同人誌の質の高さを覗かせてくれた。

「村上君と優のこと」若栗清子

五月の午後、という独特な書き出しで始まるこの作品は
ウラジオストクから転校してきた村上ミハイル君と息子の
優の付き合いを見守っている母の視点から展開していく。

「私」は二年前に離婚してフラワーアレンジメントの職を
得て優との二人暮らしを始めたばかりである。五月の午後
に優が友だちを連れてきた様子があったので茶菓子をお盆に
のせて運んで行ったとき知らない国から来た少年であるこ
とを知る。その日から連日のように白金に近い髪の少年は

2DKのわが家を訪れる。

それから半年くらい経って事件が起こった。優が叫ぶ「毎
日同じ服を着ている。汚いって、女子が」二枚のセーター
を交互に着せていたが女子の目にはダサイ汚いとし映ら
なかったであろう。「私」はすぐに車をとばしてデパート
へ。優が心配するほどにブランドの服を買いあさる。この
行動もそうであるが、作者の優しさが至る所にちりばめら
れている。六年生になってもミハイルは毎日のように通っ
てきて時々夕飯を共にするようになる。決して裕福な生活
をしている訳ではないが、優の友だちということでもミハイ
ルをいつも歓待する心の豊かさは卒業式にも現われる。ミ
ハイルの母親を色々と詮索する声が聞こえる。私はそれら
の声に対抗するようにユリアさんの隣りに座り、生まれた
ばかりの赤ちゃんの可愛らしさを手ぶり身ぶりで伝える。
そのような行動をすれば周りから揶揄されるかも知れない
が、私にはどうでもいいことで、ユリアさんの孤立に寄り
添いたい。その心は優にも受けつがれていて、中学生にな
りミハイルが「北方領土を返せ」と同級生に言われたこと
を聞き、ある日突然に黒髪を金髪にする。だが、ミハイル
も黒髪に変え、二人向き合ったとき大笑いをして髪は二人
とも元に戻るという出来事でも相手を思いやる心のあり様
がこの小説の美しいところである。

「鵜」紺野夏子

戦の理由を見い出すことはできなかった。

「水水母」木山葉子

水母と海水の明確な区分ができないように、この作品も
現実なのか妄想なのか判断としないまま展開している所が
最大の魅力であろう。結婚式をあげて三日目に目にした夫
の高校時代の女性川島芽子からの大量の手紙から妄想が走
りだす。

出張から戻った夫に手紙の束をさし出し処分してと訴え
るが、安易に頷いてくれない。仕方なく夫が手紙を焼いて
いると姑が起き出してきて夫のしていることを咎め、絵里
子をなじった。絵里子の目には部屋にある置き物さへ川島
芽子の贈り物に見えてくる。手紙に出てくる若村という男
が二人の結婚を祝いたいと言って待ち合わせをする。若村
らしい男の近くで絵里子は待っていたが、現われた夫は芽
子のいる方へかけていき、二人の会話がはっきりと聞こえ
る。これは不自然な書き方ではないかと思ったが、このこ
とすらも妄想だとすればつじつまは合ってくる。

手紙すら妄想で作りあげた産物ではないかと想像してし
まう。小説の力にあらためて感動した。

「『よもつ耶』〜更待月のこと」海邦智子

当選作になった作品であるが、まず文章とは何でも作り
あげることができるのだということに驚いた。この世とあ
の世の境に建つ「よもつ耶」で練り広げられる男の苦悩。

中学生の時に家を出たままになっていた父の家を見て来
て欲しいと入院した母から頼まれ芽子は戸惑う。何十年も
前にいなくなっていた父が生きていて、母は連絡を取って
いた。芽子は両親のなれそめに想いをはせ、夫婦の有り様
の不思議さを感じながら、母の頼みで二度目の父の家の訪
問をする。そこで大家さんと出合い父の現状のすべてが解
明する。年上の母は代々医者の子に育ち、自らも医師とし
て生きている。母の結婚を祖父母は快く受けとめたが、周
りはそうでない者が多かった。だから親類の集まりがある
と着慣れないスーツを着て、席の隅でコップを傾ける父を
芽子はひっそりと眺めるのが常だった。

のけ者のような父は親類の中ではカラスのような存在で
はなかったか。また、社会的にも立派な肩書きの母とは違
い、大工仕事得意な父は母とはあまりにも不似合いだっ
たから家を出たのではないか。作者の筆は冴え、タイトル
通りの読後感を残してくれた。

「サイクロイド」荻野史

大失恋から小学生の頃の団体競技を思い出す。円転する
リングの中の自分に接近してくる大空の太陽と雲。くるく
るまわるリングの永遠性。そして、二人目の子供が障害を
持つて生まれてから、平凡に円転していた生活の連続が二
番目の世界に強制的に局限される。色々な挑戦を試みてい
ることは理解できるのだが、円転したことのない私には挑

妻子をガス自殺でなくした男に、真潮ママが釘を刺す。「あんな、後追って死ぬ気でしょ。そんなこと誰も許さないわよ。あんなあの世の扉が開くまで、その日が来るまで生き抜くの、どんなに孤独で苦しくても」

そして、男はよもつ耶の住人となり、タクシーの運転手をして糊口をしのいでいる。客待ちの場所はいつもの坂の上。深夜だというのに老婆が乗り込んでくる。老婆は初雪が降ると死んだ主人の墓参りに行くという。その老婆さんが指につけていたアメジストはかつて男が二月生まれの女房に贈ったものだった。

不思議な婆さんに乗せてから一ヶ月位、中年の女性がタクシーに乗り込んで来た。行き先はジャンプ台のある大倉山。女がジャンプ台で練習をしている息子の思い出を淡々と語る。短いラインの文章を残して息子は空へ消えたという。そして、次々と現われる乗客の誰れもが辛い過去をひきづり懊悩しながら生きていることを知らされる。

最後に死んだ女房と息子が乗り込んでくる。心地よいリズムの文と、あり得ないがくつきりと浮かんてくる状況に文学の気高さを感じた。

「夢で逢いましょう」天野いづみ

夢の中で男と交わっていた。夢の中で感じるのは初めてだった。その快感がすさまじかったので、下着にそつと手を入れてみたが、何の変化もなかった。書き出しのインパ

クトのすごさに引き込まれた作品だった。

「光復香港」鈴木友範

現代の香港と過去の学生運動をからませた力作である。描写も構成も素晴らしく、私は一番強く押した。香港の有り方ものかつての学生運動も歴史に潜んでいる不条理との戦いであるが、それらは時間の流れに淘汰されていくだろうとの予感が、この作品の素晴らしい所である。



いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
早稲田大学文学部文芸科卒
79「流瀆の島」群像新人長編小説賞
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著「緑の手紙」(読売新聞・NTT プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞)・「鉄の光」「ノンちゃん、NONGCHAN / 聖丘寺院へ」「破壊者たち」

重い量感とユニークさ

五十嵐勉

第一六回まほろば賞は、結果的に選考が三つに割れた。

「鴉」「水母」への支持、「サイクロイド」「村上君と優のこと」「夢で逢いましょう」への支持、「よもつ耶」「更待月のこと」「光復香港」への支持と分裂した。三田氏

は「サイクロイド」と「水母」「よもつ耶」「更待月」を高く評価し、中上氏は「よもつ耶」「更待月」と「光復香港」を評価した。小浜氏は「光復香港」を買っていた。

私はどれもいい面があり、捨てがたいものがあつたので、悩んだが、「光復香港」の重い量感と、「よもつ耶」「更待月」のユニークな表現は、称揚を外すわけにはいかないと、最後に提案された二作受賞に同意した。このように分裂したのは、それぞれがよい作品であることの証左でもあるだろう。

鈴木友範氏の「光復香港」(季刊作家 99号)は、出張

先の香港で民主化運動の弾圧に巻き込まれていくのと同時に、自身の学生運動を回顧し、反抗の情熱の意味を問いつつ作品である。香港の学生たちの反抗の姿が鮮やかに浮かび上がると同時に、自身の革命へ投じた情熱の挫折の辛酸と苦渋が交錯して、理想に向けて抵抗する人生の陰影が掘削される。結局は圧殺されるしかないその結末に、人間としてどう希望に繋げるか、胸に受け止めるべきものは提出されている。全共闘世代も、今しか書き残せない時期に入っている。さらに書き続けて残すべきものを残していつてほしい。その願いを込めて、「まほろば賞」に強く推薦したい。同時受賞となった海邦智子氏の「よもつ耶」「更待月のこと」(札幌文学 91号)は、発想が独特で、タイトル、ペンネームからして変わっている。ルビなしでは読めない

言葉が、むしろ独自の世界を切り開いている。そしてその風変わりな世界の底に、死へ旅立っていく者の深い悲愁が流れている。この死者を包み込んで流れる旋律に、魅力がある。葬送の美しい調べがあると、胸底への刻印がある。これを大事にして、この世界造形を持続していつてほしい。

河林満賞に輝いた、紺野夏子氏の「鴉」(南風 48号)は、地味な題材だが、彫拓の手腕には、注目すべき力量がある。これで三度目の優秀作登場になるが、どの題材も鮮やかに処理して、小説作品として形を与える技量は高い。しかもだんだん精度が上がっている。一読した時よりも、読み込むに従って、精緻な味わいが奥を増してくる。失踪した父親の最期を、空家に棲む鴉との交誼に託して、枯らせるように終わるシーンは、人生の乾いた一つの結末を象徴している。あの世から、河林満も授賞を喜んでくれていと思う。

読者賞を獲得した天野いづみ氏の「夢で逢いましょう」(朝 42号)は、タイトルが一見歌謡曲を想わせる軽さを有しているが、中身をよく読むと、練りあげられたわがやらしい文章の奥に、厳しく磨かれた言葉の艶があり、それがある安定した構築を示している。長年の鍛錬による表現力であることが窺われ、酔いに誘われる奏鳴感を宿している。更なる結実をめざして、創作を持続してほしい。

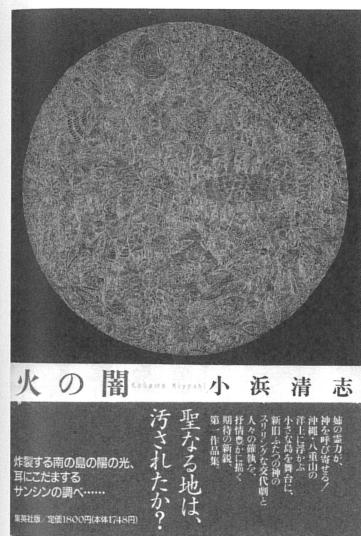
若栗清子氏の「村上君と優のこと」(「素粒」18号)は、ロシア少年と息子の交流を描いて、すがすがしい読後感がある。昨今、国際化する社会変化の波を受けて、近所や学校にも外国人の姿が珍しくない。この作品の場合は息子の友達がロシア人で、その友情の中に、ドラマが生まれ、事件と行為を通して宥和していく過程がよく描かれている。そのストーリーは感動的であり、さわやかである。ただ、息子の友人がロシア人であることは、読まないとわからないので、やはりタイトルにロシア人の名前を入れた方が、内容によく繋がっていくだろうという感想は変わらなかった。結末ももっと盛り上げられたかもしれない。

「水母」(「木木」33号)の木山葉子氏は、今回も卓越した文章力を示していて、選考委員の評価は高かった。高校時代の異性の手紙を結婚後も大切にとっておく夫との心理の齟齬から、夫婦間の亀裂は、人生そのものを深く割っていく。その陰影の機微が、打ち寄せる波音のように生の波打ち際に響いてくる。最後の水母の夥しい死骸が、何を象徴しているのかわからないまま、ただ、漠然と、自然に置かれているところに、この筆者の深い力量も感じられる。しかし、その微妙なところで、もう一つ鮮明に結像して見せられると、筆者の一段の到達がなされるように思う。

荻野史氏の「サイクロイド」(「風の道」16号)は、幾何

学模様をそのまタイトルにした特異な小説で、障害者子供に持つ運命をそのサイクロイドの軌跡図に重ねて、筋を運んでいく手法は、斬新で洒落ている。このような小説の書き方もできるのかと、その自然な叙述の流れに感心した。これは普通の小説の構築性とはまったく別なところに組み立てられる新奇な試みで、深刻な運命を、まったく異次元の運命模様として高次に祀り上げてしまう、快い抽象感がある。ただ、引用が過多で、それに寄り掛かり過ぎているのが惜しまれた。

総じて、今回もレベルの高い作品群で、昨今の芥川賞作品のレベルを凌駕する内質を備えていたことは喜ばしいことである。商業文芸誌の作品など、蹴り飛ばす勢いで、書くべきものを書いてほしい。



なかみ のり
1971 東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99「イラワジの赤い花 ミヤンマーの旅」(集英社)を上梓
同年「彼女のプレнка」(集英社)ですばる文学賞受賞
「悪霊」(毎日新聞社)「いつか物語になるまで」(晶文社)「夢の船旅—父中上健次と熊野—」(河出書房新社)「アジア熱」(大田出版)「シャーマンが歌う夜」(水の宴)(集英社)「海の宮」(新潮社)「熊野物語」(平凡社)「天狗の回路」(筑摩書房)など著作多数

刺激的な色彩

中上紀

今も昔も、夏は私にとって特別な季節だ。夏を過ぎると、なぜだか一年がリセットされたような、ある意味「正月」に近い感覚が心身に生じる。小説を書くようになってからは特にそうで、夏毎開催される複数の行事と、それらにまつわる仕事を中心に日々が回る。行事を終えるとおとし、来年の夏を考える。いつからか、この「まほろば賞」選考会も、大切な夏のイベントの一つとして私の中に在る。選考会が夏であるのももちろん理由だが、それ以上に、優れた候補作品たちから放たれる強い色彩が、灼熱の太陽と相まって多分に眩しく刺激的だからだ。

さて、今年は、いつもより多い七作の候補作品を読ませていただいた。今の時代を生きる人間、人間が作る社会の様相が、どの作品の文字の間からもにじみ出ていると感じた。

例えば、まほろば賞受賞作となった、鈴木友範氏の「光復香港」。現在あるいは近年の香港の民主化デモと、主人公自身が日本での学生時代に関わった「学生運動」の章が、交互に進んでいく構成となっている。今のアジア情勢が描かれることで、日本の「かつて」の時代は決して、断絶した「かつて」ではなく、地続きであることが伝わってくる。日本の過去に確かに存在した学生運動を振り返りながら、日本人が見るべきアジア、知るべきアジアが見える。たとえば、私たちは想像する。ウイグル自治区に住む人たちが直面している苦境を。あるいは台湾はどうだろう。東南アジアも深刻だ。ミャンマーでは軍によるクーデターから一年半、今でも多くの民衆、とりわけ若い人たちが抵抗を続ける。だが、不当な逮捕、拷問、住居の焼き討ち、空爆などの深刻な人道危機が日々繰り返られる状況は、ウクライナの戦況を伝える報道の陰になり届かない。

本作の中では日本人である主人公自身はあくまで「外国人」というマイノリティのくりに属し、その視点からフィリピン人のヘルパーであるジェニーとのやりとりなどが書かれていることも、興味深い。大きな抑圧に抗おうとして

いる香港学生が、自分の家のヘルパーにはぞんざいな態度をとるというアジア的な矛盾にも注目したい。

もう一作品のまほろば賞受賞作を紹介する。海邦智子氏の「『よもつ耶』〜更待月のこと」だ。子供と妻を失い、夜間のタクシー運転手に転身した主人公が、業務を介して出会った人々から、彼らの物語を断片的に聞いていく。いつしか読み手は、このタクシーが、死にたい人に次々と出合いながら夜を走る、すなわち死と背中合わせの乗り物であることに気づくのだ。

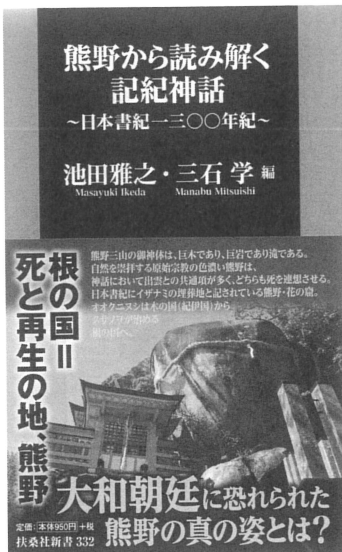
この作品の中に登場する坂の上の（よもつ耶）という磁場は、「黄泉比良坂」から来ている。生者の住むところと死者の住むところの境界にあるという黄泉比良坂。記紀では、火の神を産んで死んだ女神伊邪那美尊を、男神伊邪諾尊が、来るなど言われていたにもかかわらず黄泉の国に追っていき、そうして醜く変化した妻を恐れて逃げ帰り、途中追いつかれ、口論の果てに離縁する場所とされている。だがここでは、愛し合う死者と生者を結び付けるところだ。あるいは、あの世とこの世の間で迷っている者がたどり着くところ。仕事が忙しく一人で悩んだ妻に息子と心中されてしまったという過去を持つ男。男はここを拠点にタクシーを走らせ、待っている。そう、愛する者たちが乗ってくるのを。そのタクシーに乗って三人がどこへ行くかは読み手に委ねられている。あの世か、この世か。妻が伊邪

を助け、寄り添うところには共感する。

萩野央氏の「サイクロイド」は、最も難解であり、一般的な読者には少々読みにくさが残るだろう。主人公は、「不完全」な家族を完全にするために、この「円」すなわちサイクロイドを重ねているようで、実はこんな円自体、本当は不要なのだと、叫んでいるのかもしれない。閉じられた円環は美しいかもしれないが、無言で作品は告げる。

木山葉子氏の「水水母」では、夫が処分することの出来ない千通もの女子高生からの手紙が、潮が引いた砂浜に数多に広がる水水母に重なった。水水母は死んでいるようにも生きているようにも見え、過去の手紙もそうである。だから、「ぶちまける」のだ。

選考会が終わると、まだまだ夏はこれからなのに、一瞬涼しい風が吹いた気がした。



第16回まほろば賞選考会風景 2022.7.17 大田区民プラザ会議室で

那美尊のように、まだ来るな、来てはいけなと、男を黄泉比良坂に留めていた場所は、いずれにしても生半可な所であるはずがない。

「河林賞」を受賞した紺野夏子氏の「鴉」は、他人には絶対に理解することが不可能な、その夫婦だけの独特の関係性が描かれた作品だ。母と別れた父を思い、主人公である娘が鴉と敵対する様子が、人間同士の戦いのごとく生々しく描かれている。家族との繊細な関係、例えば嫌っていた父の作った家具に兄がこだわる場面などは、父への隠れた思いと共に丁寧に描かれ、痛々しさが伝わる。鴉は使者のように不穏な言葉を主人公に告げる。家族でも、いや家族であるが故に介入してはならない領域の存在を黒い羽根で警告するのだ。

他の候補作も読みごたえのある作品が続いた。

天野いずみ氏の「夢で逢いましょう」では、夢の中で起きていることがぼんやりと立ち現れ現実を侵食していく。逃避のように、若い恋の記憶をなぞる夢にのめり込んでいく。現実への一歩を踏み出すラストが素敵だ。

若栗清子氏の「村上君と優のこと」は、ロシアルーツの村上君が光りながら小説に登場する冒頭に、神話的な物語性を感じる。本作が書かれたのはロシアによるウクライナ進攻の前と察しつつも、今であれば異なる形での展開の可能性もあり得ると注目した。また、主人公が村上君の母親

まほろば賞 受賞の言葉 鈴木友範

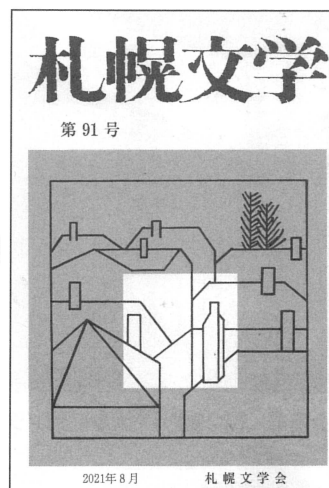
この度は「まほろば賞」に選出して頂き、ありがとうございます。
仕事を言い訳にして筆を折り、更に自費出版した本を眺めて悦に入るとい
形で見切りをつけていましたが、しかし、もっと書きたいという思いが突き上
がり、数年前から再び原稿に向かって半年に一作を目標にして頑張ってきました。
ただ、特にコロナパンデミックのせいで合評会の開催もままならず、先輩
諸氏の指導も頂けないという制約のある日々に苛立っていた最中の朗報でした。
仕事柄、異なる国々の歴史や文化を見聞き出来たことは幸いでした。当然に
も香港現地で目の当たりにした「一国二制度」を巡る^あ関心は、私もまた書
かずにいられませんでした。今後も香港を一つのテーマにしていくつもりです。
一方で受賞ということを意識せず、書きたいものを書くという原点に戻り、
表現者としてさらなる高みを目指そうと決意を新たにしているところです。
あらためて感謝申し上げます。

まほろば賞 「光復香港」

鈴木友範



鈴木友範
すずき とも のり
1948 岐阜県下呂市生まれ
73 岐阜大学農学部卒業
89 ファインアンドソフトテクノ
ロジー株式会社設立
代表取締役就任
2003 自費出版「愛惜の炎」刊行
05 「季刊作家」同人
21 小島信夫文学賞県知事賞受賞



まほろば賞

『『よもつ耶』
〜更待月のこと』

海邦智子



海邦智子
みくに ともこ
1962 函館生まれ
83 北海道武蔵女子短期大学卒
業
83 以後(株)札幌ツアーリスト、近
畿日本ツアーリスト(株)、(株)HKワ
ークス、(株)秋吉などに勤務
2004 札幌文学会同人
05 北海道鉄道文学会同人
現在専門学校在学
「愛しき人」で第9回鉄道文学大
賞優秀賞受賞



まほろば賞 受賞の言葉 海邦智子

このたびの『まほろば賞』受賞の一報をいただいた時、思わず驚きの声が脳天から突き抜け、歓喜の後の余韻が眠
りにつくまで私を包んでくれました。全国の多くの同人雑誌作品の中から優秀作に選出していただいた時点で札幌文
学会同人として代表の田中和夫氏、編集人の坂本順子氏に少しは恩返しできたと思っておりましたが、今度こそ本
当の恩返しできたと思います。私の創作活動は四十歳で会社を辞めて地元新聞社の文化センター『初めての文章教
室』からでした。そこで講師であった田中氏に教えを乞い札幌文学会に入会させていただき、諸先輩からの厳しいお
声に励まされて今に至ります。十代の頃から友人たちや家族と一緒に過ごすよりも独りの時間が大好きで自身の内面
と外面の乖離に途方に暮れたこともありましたが、創作の世界に出会い、今、私は心のままに自由に泳いでいます。
私の世界に登場する者たちは全てが愛おしい存在であり、時として主人公になります。今作の主人公も前作『孤灯の
下』での登場は『よもつ耶』の住人の一人にしかすぎず、登場は一行にも及びませんでした。そんな「彼」が、私を
『まほろば賞』まで導いてくれました。今回の受賞を励みに泳ぎの手を止めることなく、札幌文学会と共に海邦智子
の世界を創り上げてゆきたいと思います。

貴協会並びに貴誌の益々のご発展をお祈り申し上げます。ありがとうございます。

河林満賞

受賞の言葉

紺野夏子

まず、選者の皆様にお礼申し上げます。ありがとうございました。

あらためて河林満さんの経歴を確かめ、私がおその名を冠した賞を頂くにふさわしい者かと考えました。公務員として生計を立てながら創作活動を続け、文学史に残る作品を生み出した方と、平凡な主婦として家庭を維持し、子育てが終わったところからようやく執筆活動を始めた自分が、どうにも繋がらないのです。

ただ、「私の文学世界」に記されている、「小説にはいい小説と悪い小説があるに過ぎない。自分に切実なものを書くことによって乏しい才能も開かれていく」という、ご意見には深く納得し励まされました。この言葉を胸に刻んでこれからも精進して参りたいと思います。

河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしてきましたが、銀華文学賞の一時中断以後まほろば賞のなかに移されることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、記念品、賞金十万円が授与されます。（二〇二二年改訂）この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮

※まほろば賞は文学を愛好する皆様からの御寄付によって成り立っております。皆様の御支援を切に願います。106

河林満賞

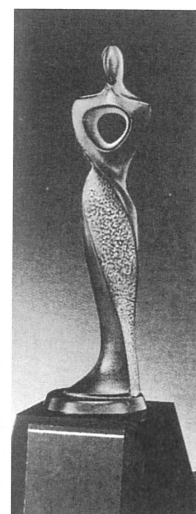
『鴉』

紺野夏子



紺野夏子

こんの なつこ
1949 佐賀県佐賀市生まれ
九州大学医学部付属看護学校卒
現在は福岡県福岡市に在住
「百日の記」で中上紀賞受賞
同人誌「南風」編集人



読者賞

受賞の言葉

天野いずみ

書いていてふと疑問に思うのは、同人雑誌に載った自分の作品が、同人や友人以外に読まれているのだろうかという事です。今回、全国同人雑誌評に取り上げていただき、その上「読者賞」までいただけると聞き、選考委員の方々はじめ、全国の『文芸思潮』読者の皆様に読んでもらえたことがわかりました。手応えのある、これほどうれしいことはありません。今後もっと言葉を磨き、その言葉が人々の元に届くよう、さらに精進して参ります。この度はありがとうございました。

読者賞

「夢で逢いましょう」

天野いずみ

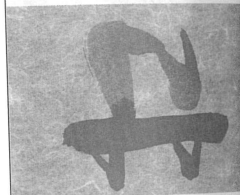


あまの いずみ
1953 富山県高岡市生まれ
77 立教大学理学部卒業
2010 文芸同人誌「朝」に入会
現在に至る 東京都杉並区在住



南風

Nangou



第48号

朝

朝 42

コロナ報と
東日本大震災から10年

読者賞について 読者から持ち点制の感想投票をいただき、その合計点数の最高点の作品に読者賞を贈ります。今回は投票金合計金額は66000円となりました。これを得票に従って配分し、各著者に贈らせていただきます。
全国同人雑誌振興会

●読者賞への御投票と賞金をお送り下さり、まことにありがとうございました。読者賞は下のよう
な結果となりましたので、ここに詳細をご報告させていただきます。

作品名 投票者	村上君と 優のこと	鴉	サイクロイド	水水母	『よもつ耶』 ～更待月のこと	夢で逢い ましょう	光復香港
木内是壽					100		
今田真理子	9	9					
山田真己乃					10		10
渡辺恵理						50	
西田宏明			10				50
和田信子		50					
夏目由美				27		80	
外山寛子	20						
宮脇永子		30					
渡辺 聡						120	
志村 譲						10	20
寒河江仁			10			19	
山田まさ子	1	15		3		1	
木村弥一		16					
計	30	120	20	30	110	280	80

作品感想 二〇一二年まほろば賞読者賞はこう投票した

●よい作品が多く、投票に苦労した。
まず「光復香港」は0点とした。

これは全く読者賞にふさわしくない。圧倒的実力を持ち、まほろば賞に必ずや輝く作品だからである。斬新な着眼点があること、現代性、この点において「光復香港」これをおいて他にまほろば賞があるだろうか。

香港のデモとともに、かつての日本での学生運動の頃のデモが語られる。

中国の共産党に信頼を寄せていたことが少しだけ語られているが、こんな数行を読むと私たちの世代はそんな先輩たちを知っているのが胸が痛い。中国の共産党は違う、その熱心な信じきった言葉を今でも思い出す。そういう思い出に触れてくる作品である。主人公と同じく留置場に入れられた先輩方を思い出した。あと、作中の刑事さん、太い万年筆を持っているのが印象的だった。今は取り調べはボールペンである。叩き上げの刑事さんから見るとデモをする学生さんは理想的すぎて敵意を持ったと語られている。読みながら、刑事の節くれだった指と万年筆が眼に浮かぶような気がした。「光復香港」と隣のページに自分の作品が並んだりしたら、きつと霞んでしまう。

「鴉」——次にまほろば賞の本賞に近い位置にいるのは「鴉」である。かつて自分を捨てた父親、機能不全家族とともに老いや介護の問題が横たわっている。これも今日的な

各作品寸評

●「よもつ耶……」は、独特な感性が光っています。「光復香港」は二二六Pに書かれている「僕らの頃は民族自決と独立を掲げることが正義で……」という文に、当時のことに疎い私は「そうだったのか!」と頭を打たれた気持ちになりました。(山田真己乃)

●海邦氏の「よもつ耶……」は男の人生を語る細かい描写のうまさ引き込まれた。(木内是壽)

●「村上君と優のこと」はさわやかな気持ちになれてよかった。「鴉」は人生の終末が象徴的に書かれていて、胸に残る。どれもみんなよかった。(今田真理子)

●「夢で逢いましょう」は、わかりやすい文章で一見平明だが、よく鍛えられた極上の文章で、何度でも読み返せる光沢がある。さりげない、自然な日常の中に胸に残るものがある。(渡辺聡)

●「光復香港」は全共闘世代の、残すべき記録。現在もアジアで渦巻く民主化運動と共鳴するものがある。胸に響いてきた。(西田宏明)

●「夢で逢いましょう」には、懐かしさがある。初恋の中に滑り込んでくる死が、人生の儚さを浮かび上がらせて、高校時代のかけがえのない何か、煌めきをもって戻ってくる。(渡辺恵理)

テーマといえよう。

紺野氏は文章力のある上手い人で、最後のシーン、カラスが鮮烈なイメージを残している。私はこの作品は非常に勉強させて頂いた。短編小説はかくあるべしというような典型的な作品である。「光復香港」がなければ一位になれたと思う。「よもつ耶」更待月のこと——これは幻想的なオムニバス作品で、銀河鉄道を思い出した。作者は鉄道の好きな人のようだ。詩的なので好き嫌いが分かれる作品だと思う。

「サイクロイド」——教養人としての作者の立ち位置が透けて見える。技術的には「」が多いのが気になる。

またわたしは自分が障害手帳2級のせい、障害者がテーマとなる作品には逆に辛めになるということもある。なぜ円環にしなければならぬのか、生きることを美しく円にするのか、なぜ? ギザギザじゃダメなのか。

しかし一方では障害者家族の問題提起をしたということでは採点を高くする人もいるであろうと思う。哲学的な点で好む人がいてもおかしくない。

「水水母」——惜しいところのある作品である。

古い手紙に綴られた、高校時代から続く人間関係に嫉妬するという話である。

女の情念をとらえた作品は今回の応募の中ではこの作品だけである。私は女の情念が描かれた作品が好きなので大変に好みなんだが、そして作者はわが故郷の高知女子大学卒業、採点を高くつけたいと思う。

ただ惜しむらくはラストシーンである。なぜ別れた夫に、

全国同人雑誌最優秀賞 同人雑誌大賞

賞金30万円



同人雑誌大賞
新設 30 万円
まほろば賞
賞金アップ 30 万円

乞御期待
第5回
全国同人雑誌会議
全国同人雑誌大賞
授賞式

今からでも遅くはないなどと思うのか。元夫と心ゆくまでな
ぜ話したいのか。高校時代の同級生の女をいつまでも引き
ずっているような男ではないか。そんな男とずっと忘れなさ
い。そうヒロインにアドバイスしたくなる。
ずるずると断ち切れない人間の思いの象徴として水水母が
登場する。絵里子が自分の人生を生きたるためには、水クラゲ
を包丁で突き刺すべきではないか。
未練な、しかしこんな女もまだいることは確かだ。要領の悪
い妹のような絵里子への励ましを込めてのポイントとしたい。
「夢で逢いましょう」——懐かしい青春の香りのする作品で
ある。淡い初恋に近いような男の子との想い出に好感が持て
る。男の子の膝のところはよく描けていると思う。星空の
シーンも良い。
細かい点では、最初のシーンに夢の後、ヒロインの下着を
濡れていたとしたほうがいいと思う。より官能的な気がす
る。ただこの男の子との関係を大変に淡くしたいというので
あれば下着が濡れていない現在の形の方が正解となる。でも
湿っていたとしてもした方が、微妙な感じが出るのではない
か。こういうシーンは作者の体験とは無関係に、作品全体に
どう響くかを考えてほしい。
「村上くんと優のこと」——良い作品だが、冒頭の方でつま
ずいた。気になったのは6行目、光をまとった白い少年とい
う言いまわし。一瞬SF小説かと思つて読み直してしまつ
た。すぐにこの少年がロシアの少年で金髪の子だということ

がわかるのだが、6行目でこの「光をまとった」と出てくる
と、読者は混乱する。光というのはやや宗教的にも取れる表
現であるから、何か他の表現にしたほうがよかったと思う。
もちろん同じ表現でも途中に出てくるのは構わない。最初の
方なので驚いたというだけに過ぎないのだから。他の所には
全く問題はなく、うまい人だと思う。全体にパステル画のよ
うな印象を抱かせる。
人種問題も、いじめの問題も、こういう風に甘やかには解
決しないと思う。人の良い学生に理解力のある先生、この物
語の設定は多分夢に過ぎない。でもそんな夢も見えていいだろ
う。作品が全てリアルでなければならぬという事はないと思
うので、ポイントを入れることにした。
ノーマン・ロックウェルの絵のように夢を語ってもいい、
そう読んだ。
七作品の彩りゆたかに
猛暑に耐えかね、カフェにこもって文芸思潮に読みふけつ
た。七作の彩り弁当を食べたような気分だ。
一作ごとに作品に話しかけるようにして読んでいく。この
一行が気に入らないとハラを立てたり、逆に胸に染みて涙ぐ
んだり。まさに泣いたり笑ったりの時間を過ごさせてもらった。
来年もまほろば読者賞に参加したい。応募作タイトルに重
ねて申し上げる。花束みたいな作品たち、文芸思潮で会いま
しょう。
(山田まさ子)